

[ワークショップレポート] ゴミ拾いから地域を考え対話するワークショップ@川崎駅

2015年10月4日、国際大学グローバル・コミュニケーション・センター(以降、国際大学 GLOCOM)は、川崎市環境総合研究所、株式会社ピリカ、NPO 法人グリーンバードの協力を得て、FDA 川崎事業所にて「ゴミ拾いから地域を考え対話するワークショップ」を実施しました。日曜日の AM10:30 に集まり、昼食をはさんで PM4:00 に終わる体験型のワークショップ。参加者全員が屋外で集めたデータに基づく路上ポイ捨てゴミ解決のアイデアとはどのようなものだったのかをレポートします。

なぜ体験型ワークショップなのか？

このワークショップは、環境問題に関心のある人が集まり、ゴミのポイ捨てという身近な問題を題材に、地域の環境美化のあり方を考えることを目的に実施されました。

GLOCOM の主任研究員・准教授の庄司昌彦氏は、「少子高齢化が進行し、一人暮らしの世帯が増加すると、昔ながらの地域の結束に依存しているだけでは、地域の力が落ちていくことにもなりかねない。自分達が住んでいる地域の環境を良くしていくには、継続的な相互コミュニケーション活動が不可欠」と主張します。庄司准教授が住民関係を維持・発展させていくために着目したのが、環境情報データと呼ばれる、写真や動画、数値などのデータです。そして、これらのデータをどのように活用すれば、住民間の環境コミュニケーション活性化に役立つかを昨年より研究しています。

環境情報データを調べる過程でわかってきた問題は、行政では路上ゴミを管轄する部署が場所によって違っていたり、市民もボランティア活動の一環としてゴミ拾いに取り組んではいるものの、街全体がどれだけ汚れているのかを分析し定量的に把握することはしていなかったということでした。

こうした状況の下で行われた今回のワークショップは、地域改善の鍵となる環境コミュニケーションの素材として、路上ゴミが実際にどの程度落ちているかというデータを自分達自身で集め、定量的に評価し、どうすればゴミのポイ捨てを解決できるかについて、対話を通して考えるものです。



過去の資料からみる川崎市のゴミ問題とは？

続いて、国際大学 GLOCOM の菊地映輝氏より、ゴミの路上ポイ捨て問題を考える上での材料として、川崎市が過去に制作した市政ニュースの動画データや、市内の写真愛好家が撮影した写真データが提供され、ワークショップ参加者全員で視聴しました。



川崎市が市政広報活動において作成してきた映像には、過去の取組みを振り返る上で参考になる素材が多く含まれています。菊地氏によると、1964年の東京オリンピックを控えた1960年代初めより、全国的に美化運動が活性化したとのこと。こうした美化活動が始まる以前は、ゴミのポイ捨ては日常的に行われており、道路には紙屑やタバコの吸い殻が散乱している状況でした。また、当時は箒で集めたこれらのゴミを清掃員がリヤカーで回収するシステムでした。実際、菊地氏が示した1954年の川崎銀座街の写真をよく見ると、道路の端の部分にゴミが落ちている様子がわかります。

他にも、川崎市が全国で初めて導入した機械式のゴミ収集車のニュースや、経済成長に伴って増加するゴミ処理の自動化に取り組むべく新設された処理センターのニュース、公共の場所へのゴミ箱設置と美化を呼び掛けるパレードのニュース、普通ゴミとして焼却処分をしていたペットボトルの分別に関するニュースを視聴しました。こうした古い映像の数々を見ると、半世紀以上に渡り、川崎市が公共の場所の美化活動に取り組んできた歴史があることがわかります。また、過去の映像を振り返ることで、ゴミのポイ捨ては1960年代から継続しているテーマであることを参加者は知りました。

落ちているゴミの数を可視化する方法とは？

このように路上ポイ捨てゴミに関する現状認識を共有した後、株式会社ピリカ（以降、ピリカ）代表取締役の小嶋不二夫氏より、どのようにゴミ拾い調査を行うかについての説明を受けました。

ピリカはゴミ拾いSNS「ピリカ」を運営する企業であり、世界77か国で使われているアプリを提供しています。誰かがゴミを拾ったらそのゴミの写真をSNSに送り、ユーザー同士で共有するとい

う仕組みで、回収されるゴミの量を計測しています。ちなみにピリカとはアイヌ語で「美しい」の意味を持つとのこと。清掃活動に取り組む個人や団体の活動記録と広報活動のためのプラットフォームとして利用されています。



さらに、ピリカでは SNS とは別に、ポイ捨てゴミの数を計測する調査を実施しています。基本的にポイ捨てゴミの累計数は増加する一方であり、その地域がキレイになったかを累計数だけで判断することはできません。調査前と調査後と比較し、本当にゴミの数が減ったかを見えるようにしないと問題が解決されたとは言えないという難しさがあります。小畠氏によると、ポイ捨てゴミの数は、場所、季節、時間帯、清掃活動の有無などにより大きく変動するとのこと。これらの特性を考慮したポイ捨てゴミのデータ定量化については、これまでは確立された手法はありませんでした。しかし、ピリカは 2014 年よりゼロから調査手法を整備し、東京 23 区で自主的に行った調査はテレビでも紹介されるなど話題となりました。

調査地点に行って実際にゴミを拾ってみる

今回のワークショップで行われたゴミ拾い調査では、上記の調査ノウハウを活かした方法で、特定の道路にどの種類のゴミがどの程度落ちているのかを数えるものであり、2つのグループに分かれて以下の手順で調査を実施しました。

1. 移動と調査地点の選定

2つのグループは、主催者が予め選定した調査地点（合計 20 地点）の地図をもらい、それぞれ 10 地点ずつ担当することになりました。各調査地点の道路全体に落ちているゴミを全部拾って数えると時間がかかりすぎるため、以下のルールを適用して行うことになりました。

- 大通りは道の片側のみを数える
- 大通り以外は道全体を数える

- 車道は歩道から約 1m の部分までを数える
- 基本的に歩道のみを数える／歩道から奥まった施設の敷地内の場合は歩道から 1m のみを数える
- 次の 5 つの条件をできるだけ多く満たす長さ 10m の範囲を選んで数える
 - 調査をする上で危険がない場所
 - 人やお店に迷惑をかけにくい場所
 - 植込み、側溝がある場所
 - ゴミの集積所やゴミ箱がない場所
 - 交差点以外の場所

2. 調査

- 写真撮影
調査地点がわかるものとゴミ拾い前の様子がわかるものの 2 種類
- ゴミ拾いと計測
大分類：「見えやすい場所」「見えにくい場所」、中分類：「タバコ」「ガム」「飲料容器」「その他」の 8 分類に分けて分類別にゴミの数を計測する
「見えやすい場所」：明らかに路上に落ちているとわかるゴミ
「見えにくい場所」：植込みの中、側溝の中、看板やコーンの影、建物の隙間等に隠れているゴミ
判断が難しい場合は「見えにくい場所」とする
落ち葉などの自然のもの、へばりついて取れないガム、建物の中のゴミは対象としない

3. 調査結果の報告

- 写真提出
- 計測結果の提出

屋外への移動と現地での調査では、全国でゴミ拾い活動を行っている NPO 法人グリーンバードの協力により提供されたビブスと軍手を全員が着用しました。この後、それぞれのグループは、地図を見ながら調査地点に移動し、ゴミ拾い調査を行いました。







ゴミ拾いをやってみて気付いたこと

ゴミ拾い調査終了後には参加者全員でゴミ拾いをやってみて気付いたことのシェアを行います。気が付いたことは付箋紙に書いて、全員で共有できるようにしました。

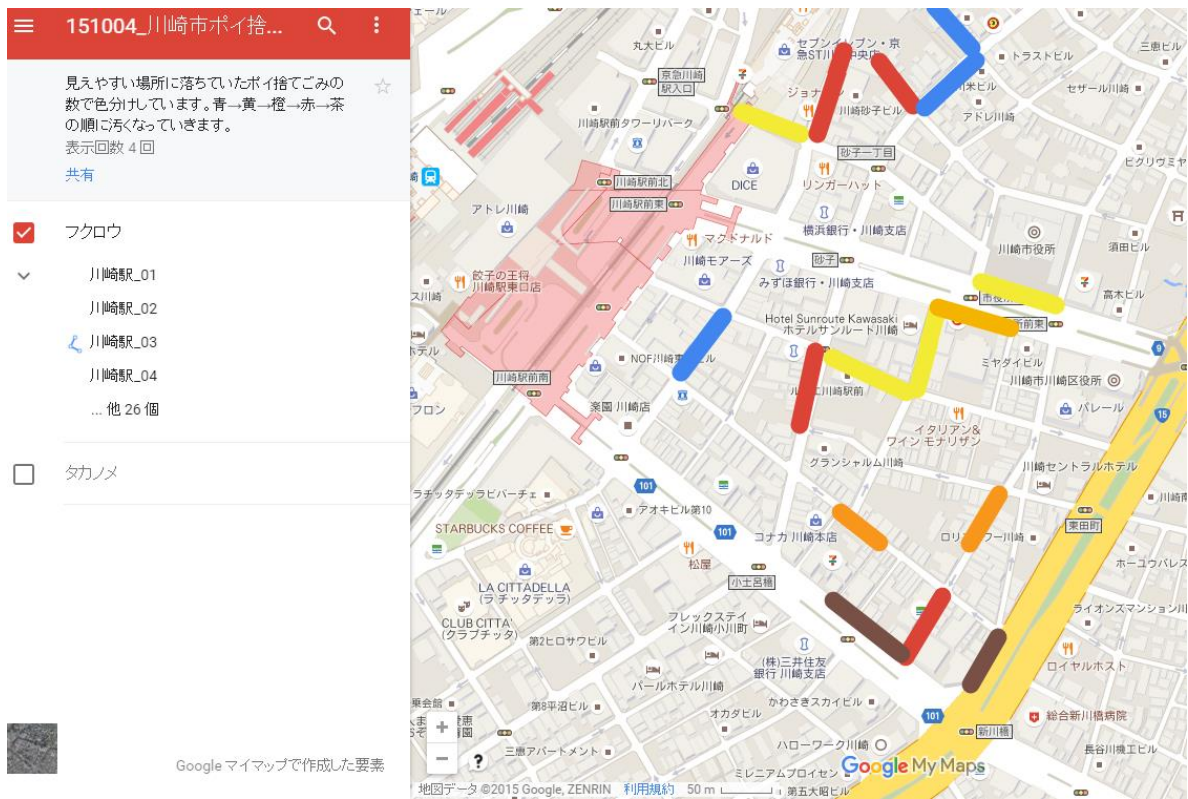




ゴミの種類に関しては、「タバコが多い」「ガムが多い」「ガムは包み紙も多い」「飲食店前に爪楊枝が落ちていた」「壊れたビニール傘が落ちていた」「放置自転車のカゴの中に飲み残しの缶が放置されていた」といった意見が出ました。また、汚れている場所に関しては、「灰皿が置いてあるのに路上に捨てられている」「路上喫煙禁止のエリアなのにタバコが捨てられている」「コンビニ前にゴミ箱があるのに植栽に捨てられている」「見える場所よりも植込みのような見えにくい場所や排水溝の中などの手の届かない場所に多く落ちている」「国道の植込みに多かった」「清掃担当がいるところは比較的キレイ」という声が上がリ、問題点として「ゴミ箱が少ない」「路上喫煙禁止が徹底されておらず、歩きタバコをしている人がいる」「ゴミを呼び込む植栽のデザインが問題ではないか」「街の雰囲気がポイ捨てを許すものになっているのではないか」といった指摘がありました。また、「タバコのフィルターやガムが 3 日で分解されるような仕組みが必要なのではないか」という興味深い意見も出ました。

川崎駅周辺はキレイなのか？

準備が整った段階で小島氏より発表されたポイ捨てゴミの集計結果は、「見えやすい場所」が 488 個、「見えにくい場所」が 872 個となりました。



| 見やすい場所 | | | | | 見えにくい場所 | | | | | 合計 | | | | | |
|--------|-----|-----|-----|-----|---------|-----|-----|-----|-----|------|-----|-----|-----|-----|------|
| 飲料容器 | たばこ | ガム | その他 | 合計 | 飲料容器 | たばこ | ガム | その他 | 合計 | 飲料容器 | たばこ | ガム | その他 | 合計 | |
| | 28 | 334 | 20 | 106 | 488 | 11 | 344 | 160 | 357 | 872 | 39 | 678 | 180 | 463 | 1360 |
| たばこ | 334 | 20 | 28 | 106 | たばこ | 334 | 160 | 11 | 357 | たばこ | 674 | 180 | 39 | 463 | |

| 見やすい | 見えにくい |
|------|-------|
| 488 | 872 |

この結果は、「見やすい場所」の2倍弱の量のゴミが「見えにくい場所」に落ちていることを示しています。これは、実際にゴミが1個見えるところに落ちていたら、見えにくい場所も含めた街全体で3個弱のゴミが落ちていることになります。ピリカが行った東京23区のデータでも、見えにくい場所には見やすい場所の2倍程度のゴミが落ちているという傾向があり、結果に大きな差異はないとのことでした。

次に、内訳をみると、見やすい場所でタバコの数が多く、見えにくい場所ではガムの割合が高まる傾向が見られます。東京23区のデータではタバコは4割～6割前後ですが、川崎駅の場合、見やすい場所におけるタバコの数の全体に占める比率は6割8分。東京23区と比べると、川崎駅周辺はタバコのゴミが多いということがわかります。

また、ゴミが多く落ちている場所、少ない場所を色で示した地図を見ると、特に汚れている場所はコンビニの前と国道沿いの市役所前であり、気付いたことを話し合う際に出た「コンビニ前にゴミ箱があるのに植栽に捨てられている」「国道の植込みに多かった」といった意見が裏付けられる結果となりました。

どうすれば路上ポイ捨てゴミを減らせるか？

この結果を踏まえ路上ポイ捨てゴミを減らすための解決策を考える試みを参加者で行いました。具体的には「Empathy Map」と「Who Do?」というゲームをグループごとに実施しました。



タバコのポイ捨てをしている人は、どういう職業で、どんなことを見たり言ったりしているか、どんなことを考えているか、どんな気持ちでいるのかを考えるために使うのが「Empathy Map」。その人にポイ捨てを止めさせるには誰がどうすればいいかを考えるために使うのが「Who Do?」です。この 2 つのゲームをやりながら、路上ポイ捨てゴミの解決方法について討議しました。結果はこちら。

考えていなかった。一步、道路を変えるだけで、落ちているものや量も違うことに気付いてとても興味深かった。」「川崎に住んでいて、自分の感覚として汚れているという感覚がなかった。でも、汚れていることをデータで見て、これからどうするかを考えてみようという気持ちになった。ポイ捨てゴミ問題の深いところまで勉強できた。」

「今日の川崎駅周辺は大きなお祭りの翌日でもあり、後片付けが終わってキレイだと思っていた。でも、拾ってみたらこんなに汚いということがわかった。そうじゃないときにやってみたいという気持ちもあるが、みんなが拾ってみること、体験してみることが大事だと思う。」

「普段の生活でゴミのポイ捨てを意識したことがなかったのも、データで汚れていることを見られたのが面白かった。」

また、ピリカの小嶋氏は「測るということは必要不可欠なプロセス。ゴミのポイ捨ての場合、このプロセスを経ることがないまま政策立案を行っているケースがあるかもしれない。」とコメント。

庄司准教授は「環境の問題は人間が生活している以上起こりうるが、工業生産の中で空気が汚れるとか、生活排水で河川が汚れるのと、ゴミのポイ捨ては性質が違うように思う。誰かが故意に捨てているから起きているわけで、本当は個人の行動を変えることで解決しうる問題なのではないか。ゴミ問題は身近で素朴だけれど、こんなにひどかったのかと驚いたのが今日の発見。定量的に測ると話題にもしやすい。どこの道路が一番汚くて、何が何%でという事実の認知を広め、解決方法を考えてみてはどうか」と提言し、ワークショップを終えました。(執筆：富永裕子)

EOF (5,974 字)